



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	The Caring Culture of Japanese family caregivers of people with cancer : perceptions of and responses to caregiving experiences in Japan(Review_審査要旨)
Author(s)	山口, 智美
Citation	
Issue Date	2015-09-30
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/32354
Rights	

(様式第5-2号)

平成27年6月19日

琉球大学大学院

保健学研究科後期課程委員会 殿

論文審査委員

主査 氏名 小林 潤

副査 氏名 福島 卓也

副査 氏名 古謝 安子



学位（博士）論文審査及び最終試験の終了報告書

学位（博士）の申請に対し、学位論文の審査及び最終試験を終了したので、下記のとおり報告します。

記

申請者	専攻名 保健学	氏名 山口智美	学籍番号 098854F
指導教員名	宇座美代子		
成績評価	学位論文 <input checked="" type="checkbox"/> 合格 <input type="checkbox"/> 不合格	最終試験 <input checked="" type="checkbox"/> 合格 <input type="checkbox"/> 不合格	
論文題目	The caring culture of Japanese family caregivers of people with cancer ; perceptions of and responses to caregiving experiences in Japan		
審査要旨（2,000字以内） 本論文はがん患者家族の介護経験に対する認識とレスポンスに関して、日本の文化的背景との関連を明らかにし、且つ世界的先行研究をレビューし考察を加えた初めての英語論文であり、保健学の博士論文として相応しいと判断した。日本は高齢社会を迎え、高齢者介護の量・質ともに維持することはその対象や家族の健康に対して貢献するだけでなく、社会保障制度の維持そのものに影響する。すなわち社会の介護キャパシティを向上させることは、医療費や社会福祉に対する費用の増大を抑えることにもつながることから国・地方自治レベルでも15年近く強化をおこなってきている。一方、高齢者だけでなく、発達障害や難病を抱える家族の問題は、保健医療福祉の従事者においても可視化しがたいことが多いことは報告されているが、その要因について論じられている英語論文は少ない。本論文は、質的研究としてエビデンスの限界を論じながらも、これらの問題の一つが日本の文化的背景との関連していることを科学的にエビデンスとして明示したことは、重要であ			

ると考える。

質的記述的研究方法を用いて、日本人がん患者家族の介護者としての経験に関するインタビューを実施し、その逐語録から特に日本文化的価値観を反映した6つのカテゴリーを抽出している。6つのカテゴリーは、①恩－患者が与えてくれたことに報いる（恩を返す）、②社会的役割として担わされた介護役割、③遠慮/迷惑－助けを求める事を躊躇する、④強い絆としての家族意思決定、⑤思いやり－患者の思いに共感する（寄添う）、⑥祈り－八百万の神と祖先に祈る、であった。これら6つの日本文化的価値概念とケアの有り様を深く洞察し、文化的価値観は介護者の日常生活のあらゆるところに浸透していることを示した。そして、異なる場所、文化、社会において柔軟で個別性のあるケアを提供することが重要であると結論づけている。さらに、介護者の日本文化的価値観と日本の家（内一外）の概念についても考察し、介護者の家族アセスメントのみならず家アセスメントの必要性について触れ、今後の研究課題としている。

近年インターネットジャーナル等の普及によって開発途上国を含めた多くの研究者や政策決定者は世界的潮流を real time に見ることができるようになっているなかで、日本からは生物科学に比較して、社会科学の研究が英文で発信されていることが少ないのが現状である。一方、高齢社会は日本のみならず、他アジア諸国でも対応がせまられており他のアジア諸国と似通った文化的背景をもつ日本の知見を発信していくことは世界的にも重要であると考えられる。これらのことから、本研究をさらに発展させて、日本およびアジアの文化的背景と介護について研究を広げて、世界に向けて発信していくことが望まれる。

また妥当性のある方法を使用した研究デザインの作成と解析手法の使用、保健学研究としての倫理的配慮から博士論文に値する研究内容であることも判断され、また質疑応答についても、単に回答するだけでなく PI(研究責任者)としての意見を明確に述べており、博士を授与するに値する研究者と考えられた。